

聖金曜日・主の受難

福音朗読 ヨハネ 18・1～19・42

2023.4.7 19:00

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

聖金曜日にわたしたちはイエス様のご受難、十字架の死を思い起こします。今日、長い朗読を分担して読みましたけれども、ヨハネによる福音書におけるイエス様の十字架の場面には、イエスが愛する弟子という人物が登場します。

最後の晩餐と十字架の場面と復活の場面に登場してくるこの弟子は、読者がその場面に自分もいるように読むことができるように、ヨハネの福音書の作者が配置したキャラクターだと言われています。歴史的にイエス様とおなじ時代を生きた弟子の一人であると同時に、読者が感情移入してその場面に自分自身も置く、そういうためのキャラクターですね。その愛する弟子が、イエス様が十字架に架けられたときに母であるマリア様と女性たちと共に十字架のもとに留まっていた、というこの記述は、他の弟子たちは皆逃げ去ってしまった、でも、あとの時代のわたしたちは聖霊に支えられて、マリア様の取り次ぎのうちに、イエス様の十字架のもとに留まることができますように、というのちの時代の信者たちの願い、あるいは理想を表していると言うことができます。

であるのに、わたしたちは自分自身の信仰生活を顧みると、イエス様の十字架のもとに留まっているとは言にくい現実があります。あるいは、イエス様の十字架を軽んじるという心になることがしばしばかもしれません。それはどういうことかと言えば、苦しみの中にイエス様との出会いがあるということのを忘れ、ただひたすら「嫌だ嫌だ」と自分が体験している苦しみとか悲しみに対して、そこから逃れる道を探すだけで、その中でイエスに出会おうとしないという態度と、それから、他の人の苦しみに対して無関心であり、それは自分とは関係ないと思ってそこから逃げてしまう、そういう二つの態度に表れます。

でも、わたしたちは一人ひとりの苦しみの中で、イエス様と共に、その苦しみの意味を父である神様が明らかにしてくださるときまでそこに留まる、あるいはイエス様と出会う入口として受け止め、また他の人と繋がっていく、他の人の十字架のもとにマリア様の助けのうちに共にある、そのようなことを通して一人ひとりの中に神の国、イエスとの出会いが深められていくということを思い出す必要があると思います。今日これから世界の様々な人々のために共同祈願

を通して祈る、その祈りを通して、わたしたちの心が自分の思いの中に留まっていることから解放されますように。

そして、十字架の前に礼拝する、そのときにイエス様の十字架を通して、ご自分の苦しみを通してわたしたちに出会おうとされたそのイエス様の聖心を軽んじる今までの行いをお詫びするとともに、十字架のもとにマリア様と共に立つ、その恵みを願う新たな気持ちで信仰生活をもう一回歩み始める、その思いで十字架を礼拝する、その時を持ちたいと思います。

この聖金曜日の典礼が、世界中で苦しんでいる多くの人々、そして一人ひとりの中にある苦しみや悲しみの中に神様の恵みの耀きが出る、その神の業に繋がるものでありますように、恵みのうちにこの典礼を続けてまいりたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>